

---

# 歪みの国のアリス

元号四年

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

歪みの国のアリス

### 【Nコード】

N7565T

### 【作者名】

元号四年

### 【あらすじ】

知ってる人もいるかもしれませんが（知らない人が大半だと思いますが）、ケータイアプリの「歪みの国のアリス」を二次創作してみました。主人公は完全にオリジナルですが（どこかで見たことある名前だ、とか言わないでください。全くの別人です）、基本的に原作準拠でやっています。

## 終わらない放課後

アリス、僕らのアリス

あなたの腕を、足を、首を、声を僕らにくだ

さい

あなたを傷つけるだけの世界なら捨ててしま

って

ちぎれた体は、狂気に包まれて穏やかに眠る

さあ、覚めることのない悪夢を

あなたに……………

夢を見た後は、現実と夢の境目が曖昧だ。

目が覚めてもしばらくは、どちらが夢でどちらが現実なのか、はっきりしないことがある。俺の隣では、いつも俺と図書室で勉強している亜理紗がやすやと寝息をたてて眠っている。髪を撫でると、少し身をよじらせた。そんなしぐさの一つ一つがとても愛しい。

視線を少し左にずらすと、なんだか見慣れない物体が目についた。……………なんだ？ これ？

何かの物体に直接黒くて薄汚れた布をかぶせたような、そんな感じ。

「亜理紗、起きて」

そう言つと、亜理紗はもぞもぞした動きでこちらに振り向いた。

「んー？ りゆうまー？ なにー？」

俺は再度左を見ると、やはりさっきと変わらぬ位置に謎の物体は

置かれていた。いい加減、亜理紗も謎の物体に気付いたようで、視線で「これ何？」と言っていた。

俺もその正体が分からないので、視線で「さあ？」と返しておいた。

視線を上げて行くと肌色の肌のようなものが目に入った。そして、三日月が寝転んだ形の口、その中に黄ばんだ鋭い歯が並んでいる。なんてでかい口だよ。まるで赤ずきんを丸呑みしようとしている狼のようだ。

「おはよう、アリス」

口が動いてそう言った。

口……………？

「……！」

俺と亜理紗は跳ね起きた。

「だ、誰この人……………？」

亜理紗の声は震えていた。まあ、こんなのに遭遇したら誰でもそうなるだろう。亜理紗が動揺しまくっているおかげでか、俺は冷静でいられるんだけど。

亜理紗は驚きすぎたようで、椅子からずり落ちそうになっていた。その人（人？）は、手足を折りたたむようによろしくして、図書室の机の上に乗っかっている。

「な、なんで机の上に人が……………？」

亜理紗が不意にそんなことを言った。いま重要なのはそこじゃないと思うんだけど。

俺はとりあえず、一番気になっていることを聞いてみることにした。

「あんたは誰だ？　なんでこんなところにいる？」

そう聞いてみたが、反応はなかった。俺の方を見もしないので、無視されているんだと思った矢先、

「僕はチェシャ猫だよ」

そういった。チェシャ猫といえば、童話「不思議の国のアリス」

に登場する猫の名前だった気がするが。まあ、今はそんなことはどうでもいいが。

「へえ、そうなんだ。じゃあ、こっちから用はもうないから帰らせてもらおうよ」

そう言つて、亜理紗を無理矢理図書室から引つ張りだして、さあ、帰るか階段のある右の方をみると、そこにはありえない光景があった。

さっきまで階段があった場所には、真っ白で冷たい壁が出現していた。さらに、左を見ると、果てしなく長い廊下が続いていた。正直、正気を失いかけたが、亜理紗が俺の手を握ってきたので、かろうじて正気でいられた。

ふと、背後に気配を感じた。そして、よせばいいのに後ろを振り向いてしまつて、

「！」

さっきの変な人（人か？ 自分のこと猫とか言つてたし）が亜理紗の背後に立つていた。

「どうかしたかい？」

そう聞いてきた。

どうかしたかい？ と聞かれても、こっちも状況がよく分かってないから、返答ができない。もしかしたら、この人（もう面倒だから人でいいや）は何か知っているのかもしれないという疑問に至るのは普通だと思う。

「あのさ、あなたは今どういう状況か知っているんじゃないのか？」

そう聞いたが、やはり少し間が開いた。考え込んでいるのか、それとも聞いていないのかよく分からない表情だ。数秒の沈黙の後、

「シロウサギを追いかければいいんだよ」

そんなことをたまつた。

意味が分からない。なんでシロウサギ？ っていうかなんでウサギ？ 会話が全く噛み合つてない。

「あなたは………ウサギを探してんのか？」

なんでもいいからまともな答えを返して欲しい。

俺と亜理紗はこの変人から少し離れようと、後ずさった。

「僕は探してないよ。アリスが追いかけるんだよ」

そういえばずっと気になっていた。アリスつてのは誰なんだ？

俺の名前は龍馬だし、亜理紗も……………。

……………まさか？

「アリスつてのはまさか……………亜理紗のことか？」

「え？ あたし？ 違うよ」

まあ、そうだろうな。あくまで可能性の話だし。

「亜理紗はアリスだよ」

すると、その人はそんなことを言い出した。

「ちっ……………違います！ あたしはアリスなんかじゃありません！」

亜理紗はやたら首をぶんぶん振り回しながら否定した。

「……………もしかしてさ、人違いじゃないの？」

俺は自然にそう言っていた。

亜理紗とは小学校からの付き合いだけど、こいつがアリスなんて呼ばれてるところを見たことは一度もない。

それに、仮にそうなら話が全くかみ合わないのも分かる気がする。

「違うないよ。僕らはアリスを間違えたりしないよ」

「でもあたしはアリスなんかじゃありませんから！！」

亜理紗が大声を上げるとこなんてあまり見ないから少し驚いた。

「アリスだよ」

話聞いてなかったのかこいつ。

「だから、あたしは違うの！！ あたしの名前は東城亜理紗つていう生粋の日本人としての名前があるんだから！！」

「……………」

「そりゃ、ちよつとは発音は似てると思うけど、あたしは英語もかなり苦手だし、ええと、だからつまり」

亜理紗は少し口ごもった。一度にたくさん喋ったから何をいえばいいのか分からなくなっただらう。

「あたしはアリスじゃないんです!!」

「.....」

ややあって、チエシヤ猫さんはコクツと頷いた。ようやく話が通じたらしい。これで一件落着

「じゃあアリス、シロウサギを追いかけよう」

出来なかった。

「!?!」

亜理紗はさらにびっくりしている。

なんかコイツのこと一発殴りたくなってきた。亜理紗がいなかったら殴つてるところだ。

「あたしの説明はなんだったの.....」

亜理紗がとても悲しそうな顔をしている。俺も亜理紗も言葉を失った。

ふとチエシヤ猫のほうを見ると、顔の半分を覆いつくしたフードが目が付いた。

フードの奥には、暗く深い闇が見える。吸い込まれそうな闇に俺は悪寒を感じた。

すると、チエシヤ猫は亜理紗のほうに手を伸ばした。

パンッ

亜理紗はその手を振り払った。小気味のいい音が廊下に響く。

「龍馬、もう行こう」

そう言つて俺の手を引つ張ってきた。俺は抵抗することも出来ずにずると廊下の奥のほうへと引つ張つていかれた。俺の手を引く亜理紗の手にははつきりとした恐怖と怒りが感じられた。

さて、引きずり出されたのはいいけど状況はさっきと全く変わっていない。

右手には打ちっぱなしの壁が、左手には永遠に続く廊下が。窓から外を見ると、真っ赤な夕焼けに染まった街並みが見える。どうやら、おかしいのは内部だけ

「あれ? 何もねえ」

外には車はおろか、人の一人すら歩いていない。この時間だったから外で野球部が練習してるはずなんだけど……まあ、いいか。とりあえず、このままここにいっても打開策は見つからなさそうだから先に進んでみることにした。

何分歩いたか分からないが、まだこの廊下の果てはみえない。後ろを振り返ると、ポツンと黒い物体がみえた。多分、あれから一歩も動いてないんだ。

亜理紗の顔を見ると、怒りは消えたようだが、かわりに不安が大きくなったような顔をしていた。

「亜理紗」

俺が名前を呼ぶと、おずおずといった感じでゆっくりと俺のほうを見た。その目は不安に揺れていた。

「大丈夫。事態はいまいち飲み込めないけど、なんかあったら俺が守ってやるから」

そう言つと、言葉は出さずに俺の手を強く握り返してきた。

俺は、こいつのためなら世界を全て敵に回すだけの覚悟はある。

何があっても必ず守る。その覚悟がなければ

ガタツ

……なんだ？ 今の音？

二つ奥あたりの教室から聞こえてきた。なにかいるんだろうか。

隠れるようにして中を覗くと、ポツリと佇む人影をみつけた。スーツを着込んでいて、学校にはそぐわないイメージの人だと思った。

亜理紗は藁をもつかむような気分だったのか、勢いよく扉を開け放った。そしてその人のところに駆け寄ろうとして、やめた。

……なんだ……あれ。

白いワイシャツとスラックス姿のその人は、パツと見はサラリーマンのように見える。

だが、普通のサラリーマンには決して無いものがあった。

いや、サラリーマンじゃなくても普通の人には無いモノ。

頭から天に向かって伸びる二本の白い耳。



ウサギの……きぐるみ？

けど、それにしても良く出来すぎているような気がする。

おまけに、ウサギの向こうの景色がうつすらと見えた。

……透けてる？

「あ……あのう……」

亜理紗が不安に満ちた声で話しかけた。こんな不可解な生物（生物か？）に話しかけるのは相当な勇気が必要だったはず。俺は話しかけるべきかどうかずっと躊躇っていたから。

俺と亜理紗はゆっくりと正面に回った。

「……！？」

俺は息をのんだ。ふかふかの白い毛に覆われた顔と手、前に突き出た赤い鼻。

……きぐるみなんかじゃない。

だけど、そんなことよりも俺たちを驚かせたのはその手だった。

ウサギの右肩から先はべつとりと血で、真っ赤に染まっていた。

「なんで……誰の血なの……！？」

亜理紗が恐怖に満ちた声でそんなことを言った。誰かに答えを求めているわけではなく、頭の中の考えをそのまま発しているような感じだ。

これはウサギの血か？ それとも誰か別の人のか？

赤く濡れたシロウサギの胸には人形が抱かれている。赤ちゃんほどの大きさの人形だ。

だけど、その人形には腕も足も頭もない。幼い子供のようにぷっくりとした、腹部の胴体だけを、ウサギは大事そうに抱えていた。

あやすような歌声が聞こえてきた。

「ウデ ウデ ウデ ウデはどこだろ

ウデがなくっちゃ 僕にふれてもらえない」

ウサギの手から伝わった血のしずくが人形の腹をすべり、床にぽたりと落ちた。

新鮮な血。まるで、ついさっき誰かを殺してきたみたいに

「足りないなあ」

ウサギの声に、亜理紗はビクツと身を震わせた。ウサギは人形に目を落としたままだ。

俺たちの存在は無視されている。いや、もしかしたら、そっちのほうがいいのかもしれない。

「だめだめ、足りない……急がなきゃ……」

そう言っただけで白いウサギは、ふらりと前のドアに向かって歩き出した。そのとき、一瞬目が合ったような気がしたが、ウサギはそのまま教室から出て行った。

「アリス……」

ウサギが教室を出る直前、そんな呟きが聞こえたが、亜理紗には聞こえてないようだった。

静寂が訪れた。俺も亜理紗もそこに呆然と立ち尽くしていた。

ウサギの亡霊？ それとも幻覚？

不思議なことが多すぎて、どこから反応すればいいのかが分からない。

夢……じゃないよな。ウサギが立っていた場所には小さな赤い血の池がはつきりと残っているし。

扉を開けると、血の跡は廊下の奥へと続いていた。廊下に未だ果ては見えない。俺は亜理紗の手を引き、廊下の奥へと歩いていった。

もつどのくらい歩いたのか、いい加減変わり映えのしない廊下に飽きてきたころ、ようやく廊下の端が見えてきた。

俺はほっとしてから、すぐにがっかりした。近づけば近づくほど、それはただの壁に見えた。

「行き止まりかよ……」

ここまで歩いてきたのにそれはないと思った。

……あれ？

落胆しながら近寄った俺は、その壁に小さな小さな扉を見つけた。とても小さな扉だ。高さが20センチくらい。とても通れそうにな

い。指で極小サイズのドアノブを掴んでまわすと、意外とあっさり開いた。床に頭をつけるようなかたちで向こうを覗くと、向こうにも同じような廊下が続いている。

けれど、決定的に違うものが目に入った。

「階段だ！」

俺がその声をあげると、しゃがみこんでいた亜理紗も「えっ？

本当？」と声をあげた。これで脱出できると思ったが、嬉しさは急速にしぼんでいった。

どうやって通ればいいんだよ、こんな小さな扉。

俺は制服の汚れを払いながら立ち上がった。

「参ったな……」

いよいよカーテンを使ってベランダから降りるか、考えるときが来たのか。小さな扉のある壁の厚さは大体三センチ弱しかなかったから、いざとなれば机とかでぶっ壊すこともできるけど、それは最終手段としてとっておこう。

俺はそこそこ運動神経はいいけど、亜理紗はどうだろうか。しかも、ここは四階だ。落ちたらただじゃすまない。運がよくてもかなりの怪我を負うだろう。

そんなことを考えながら一番近い教室のドアを開けた。

「あれ？」

俺は入り口で足を止めた。この教室だけ他と雰囲気が違う。

ピンクのペーパーフラワーと色とりどりの折り紙で作られた鎖が、教室を飾っていた。

生徒用の机と椅子は全て後ろによせられて、教室の前方に空間が出来ていた。まるで、幼稚園の誕生会か、お別れ会のような。だが、楽しいな雰囲気とは反対に、教室内はひっそりとしていた。

黒板にはチョークで何か書かれていた。いろいろな絵も描かれている。その真ん中に赤い濡れた字で、

『おかえり 僕らのアリス』

と書かれていた。まるで、いま書かれたかのように生々しい。

「アリス……」

そう、亜理紗が呟いた。

今日はなんだかよく聞く名前だ。その黒板の手前、教壇の上には少し大きめのバスケットが置いてあった。近寄ってみると、バスケットの上には、

『私を食べて』

と書かれた紙が置いてある。なんだ？ 食べ物か何かなのか？

亜理紗が自然な動作でそれを開けた。

「!?!」

いきなり亜理紗が物凄く驚いた表情で後退った。そして、少し遅れて俺も覗き込んで、

「!?!」

凄く驚いた。中に入っていたのは

「これって……人の腕か？」

肘の少し上から切断された白い腕だった。血の気がなくなった腕はまだ腐敗が始まってなくて、それが切断されてからそれほど時間が経っていないように感じられた。俺は床に座り込んで小さくなっている亜理紗を連れて教室から出た。

さっきのはなんだったんだ？ 長さ的には子供の腕だった。切断面についていたのは血なのか？

亜理紗は吐き気がこみ上げてきたのか、口を押さえてうずくまっていた。俺は優しく背中をさすってやると、少し落ち着いたのか俺に抱きついてきた。普段ならドキドキのシチュエーションだが、今は別の意味でドキドキしている。

「どうかしたかい、アリス」

声のしたほうを振り向くと、チェシャ猫が立っていた。

「あれはあんたの仕業か？」

「何が？」

誤魔化している様子はない。だが、コイツに聞きたいことは山ほどある。

「とぼけんな。あんたはあそこにある腕が何なのか知っているはずだ。それに、さっきウサギのような生物に出会った。あれはなんなんだ？ 納得のいく返事をしてもらわない限り、俺たちはあんたの言うことは信じない」

だが、これはもしも納得してしまったら、俺たちはこのチエシヤ猫が言うことを受け入れなくちゃいけない。亜理紗がアリスだっていう点も含めて。

「……………」  
チエシヤ猫はなにか考えているようだ。何も考えてないのかもしれないが。

「パンだよ」

……………はあ？

突如発せられた言葉に耳を疑った。

何言ってるんだコイツ。

前から会話が噛み合っていないとは思っていたけど、今回はさらに意味不明だ。もしかしたら、ちゃんと会話は成立しているけどこっちが意味を理解できないとかそういうことなのか？ 考えてみると今までもちゃんと会話は成立していた。理解に若干時間はかかったが。もしかして、返答を簡潔に済ませてるだけなのか？

と、いうことは？

「まさか、あの腕がパンだったのか？」

「そうだよ」

返事は実に簡潔に済まされた。

俺は亜理紗と一緒に教室に戻り、腕をよく観察してみることにしたが、亜理紗はどうしても嫌がったから、俺一人で見ることにした。

見れば見るほど人の腕にそっくりだ。指先にはちゃんと指紋までついている。だが、チエシヤ猫曰く、これはパンらしいので、特に恐怖は感じなかった。俺は断面の観察に移行した。さっきから、亜理紗がチラチラとこちらを見ている。そんなに見たいならみればい

いの、頑固なんだから。

断面は真っ赤な液体でデコレーションされていた。所々黒い粒が目立つ。そして、観察している最中に気付いたことがいくつもあった。

まずひとつ、骨がない。この時点で、やはり人間の腕じゃないなと思った。

二つ目、腕の中に詰まっている赤い液体、これはどうやらイチゴジャムのようだ。匂いを嗅ぐと、仄かに酸っぱくて甘いにおいがした。それに所々に点在する黒い粒、これはイチゴの種で、気泡がポツポツとあった。

三つ目、人は死ぬと数時間で腐敗がはじまり、そのときに腐敗臭が発生するはずだが、これは全然そんな感じはしない。逆にどれだけ時間が経とうとも、いつまでもこのままのような気すらしてくる。どうやら、これは本当にパンのようだ。もう疑いようがない。

「これはパンだな」  
俺は亜理紗に聞こえるように言った。どうせ見ないだろうけど。

「で？ これはどうしたらいいんだ？」

これがパンだと分かったところで、どうにかしようとは思わない。何か説明が欲しいが。

「食べるんだよ」

うむ、実に分かりやすい回答だ。簡潔に済まされていて無駄が一切ない。

「って納得できるか！！」

「食べれば小さくなるよ」

……………なるほど。小さくなるのか。それじゃああの扉を通れるわけで

「よし、食つか」

「いきなり何言ってるの龍馬！！ 正気に戻って！！」

「ぐばあっ……」

いきなり腹を強打された。最善の判断だと思ったんだけど。

腹の痛みには耐えながら顔をあげると、わなわなと体を震わせている亜理紗と目が合った。

「ちょ、ちよつと待て亜理紗!! これは最善の策なんだよ!!!」  
「何が最善の策よ!? 龍馬はもう少しまともだと思ってたのに!!」

「とりあえず落ち着けて!! 俺の話を聞け!!」

「うるさい馬鹿!! たとえパンだろうと腕の形したパンを普通に食べるなんて信じられない!!」

「じゃあ輪切りにすればいいのか!？」

「そういう事言ってるんじゃない!!」

「じゃあどうしろってんだよ!? このパン食わないとあの扉は通れねえんだぞ!!」

「それは……でも、それ以外にも方法はあるはずでしょ!？」

そんな俺たちのやりとりを見ていたチエシヤ猫は、パンの腕を持って亜理紗の前に立って、

「お食べ」

そう言った。やはりこれが最善の策のようだ。っていうか、この方が早いし。

「ぜ、絶対にヤダ!!」

だが、亜理紗は必死に抵抗していた。ここまで嫌がられると、そこまでして強要する必要はないかなと思っていた矢先、俺は自分の目を疑った。

チエシヤ猫が神速の如きスピードでパンを亜理紗の口に押し込み、鼻と口を押さえた瞬間だった。俺は言葉を失い、数秒動けずにいた。そして亜理紗の喉から「ごくん」という音が聞こえて、俺の体はもとに戻った。

「お前、亜理紗になにをした!？」

気付いたらチエシヤ猫の胸倉を掴んで、そう叫んでいた。

チエシヤ猫はずつと変わらずにんまりとした顔をしていた。今はそれがとても腹立たしい。

俺はチエシヤ猫を突き飛ばして亜理紗に駆け寄った。過呼吸をしている。早く落ち着かせないとまずいことになる可能性がある。さっきと同じように背中を擦っていると、亜理紗の体が小さく震えたと思うと、いきなりぐんぐんと縮んでいった。

「!？」

俺は心底驚いた。チエシヤ猫はパンを食べれば小さくなると言っていたが、本当のことを言うとあまり信じられなかった。ここはフアンタジーな世界じゃないからだ。

「龍馬？」

少し時間が経つと、かなり下のほうから亜理紗の声が聞こえた。下を見ると、床に落ちた女子用のブレザーの一部分が山のように盛り上がっていた。

「亜理紗？」

まさかそんなに縮んだのか？ 俺はブレザーを持ち上げると

生まれた姿のままの亜理紗が立っていた。

俺は絶句した。口をぽかんと開けたまま硬直した。そして、俺の様子をみて不審に思ったのか、亜理紗は自分の体を見て、

「きゃああああああああああつ!!!!!!」

絶叫した。するとこちらを見て、

「いつまで見てんのよ!! 馬鹿!!!!」

即刻後ろを向くことにした。すこし経つと亜理紗から、

「もういいよ」

と、言われて振り向くと、ブレザーに付いていたリボンを体に巻いた亜理紗が立っていた。そして、俺は再度絶句した。

は、裸リボン？ やべえ、可愛い。まるで天使みてえだ。

「ほら、あたしも食べたんだから、次は龍馬が食べる番だよ」

亜理紗はそう言つて、チエシヤ猫が持っているパンの腕を指差した。

「いや、それはいいんだけどさ」



ひとつやつときたいことがある。俺はブレザーの内ポケットから小さな裁縫セットを取り出し、自分のシャツを切り裂き、シンプルで小さなワンピースと俺が着るための小さな服をほんの五分足らずで作りあげた。本当はちゃんと下着も作りたかったが、そこまで器用じゃないから、亜理紗のはサラシと小さなパンツを苦戦しながらなんとか縫い上げ、俺はふんどしで我慢することにした。

俺が作ったワンピースは少し幅が大きかったらしく、片方の肩が丸見えになってしまったが、亜理紗はありがとうと言ってくれた。「じゃあ、いくか」

気合を入れて、俺はジャムパンにかぶりついた。

ジャムパンは甘いクリームを練りこんだようなパン部分と、酸味の利いた甘すぎないイチゴジャムが絶妙に絡み合っていて、とてもおいしい。

飲み込むと、不意に視界が揺れた。そして俺の体はぐんぐんと縮んでいった。

目を開けると、やっぱり俺も素っ裸だった。俺はちかくに置いてあった服を手にとり、手早く更衣をすませた。

そして、遠くで（俺たちが小さくなったから遠くに感じるんだけど）どこかを見ているチエシヤ猫を呼ぶと、すぐに近づいてきて超巨大な顔を近づけて、

「どうかしたかい？」

と、言った。俺は亜理紗と一緒にさっきの小さな扉の前まで連れて行ってくれるように頼むと、チエシヤ猫は手を差し出して、

「お乗り」

と言ってきた。

チエシヤ猫の手に乗り、扉の前まで来ると、やはりちょうど通れるぐらいのサイズになっていた。俺は亜理紗の手を引いて扉をくぐり、下に向かうことにした。

普段はあまり気にしないが、階段は一段が三十センチくらいの高

さがあるから一段降りるだけでもこのサイズだと重労働だ。よく分からないなら、二階から階段を使わずに降りるようなものだと思うってくれると分かるはずだ。

「あのう……………」

というか、どうやってもとのサイズに戻るんだ？ ジャムパンで小さくなるならアンパンかメロンパンでも食べばいいのか？

「すみません……………」

そういえばチェシヤ猫はどうすんだろ？ 窓から下に降りるのか？  
「ちよつと……………」

「なんだよ！？ うっせーな！！」

俺が大声を張り上げて後ろを向くと、謎の巨大生物が立っていた。多分高さは二十センチくらい（今の俺たちからみると二、五メートルくらい）。

「な、なにこれ……………クマ？」

亜理紗がまた怖がってる。まあ、端からみたら肉食獣だし。

「落ち着け、こんな小さいクマがいるか」

「全然小さくないじゃん！！ 超巨大だよ！！」

「だから落ち着けて。いまは俺らが小さくなってんだからこいつはネズミサイズだよ。どうせハリネズミかなんかだつて」

服を着ているという点を除けば、だが。

俺の説明を聞いてたのか、謎の巨大生物は

「僕を一目でハリネズミだと分かってくれたのはあなたが初めてです！！」

と感激していた。

「な、なんでハリネズミが日本語喋ってんの？」

俺も亜理紗と同意見だ。普通動物は人の言葉を喋ったりはしない。

「え」

亜理紗の質問に対して、ハリネズミは素っ頓狂な声をあげて固まった。

「どうして学校にハリネズミがいるの？」

「え」

「……」  
「……」  
「な、なんだこの空気。」

「……」  
「……」  
「誰も言葉を発さない。空気がどんどん重くなっていく。」

「……あ、あの……」

「……えっ？」

「どうやらこのクソネズミは話を聞いてなかったらしい。」

「も、もういいよ……」

俺は目を閉じて大きく溜め息をついた。どうやらこの変なやつらは人の話をよく聞かない傾向があるらしい。

「りゅ、龍馬……」

ふと目を開けると、亜理紗にもすごい勢いで詰め寄っているハリネズミが視界に入った。

とりあえず、亜理紗をハリネズミから引き離して俺の後ろに回らせた。それでも亜理紗に寄ろうとしたから、一喝すると近寄るのをやめた。

「で、お嬢さんたちはこんなところでなにしてるんですかあ？」

こっちのセリフだよ。なんでハリネズミがこんなところにいるんだよ。

「いろいろあって、困ったことになってるの」

亜理紗はハリネズミの質問に律儀に答えていた。

「二、三の問答を繰り返したあと、ハリネズミが

「あのー、お嬢さんひよつとして、アリスじゃないですか？」

と言った。今日は本当によく聞く名前だ。

「ちっ、違いますっ」

亜理紗は精一杯首を左右に振った。そこまで全力で否定すること

もないと思うんだけど。

「ああ……………違うんですかああああ……………」

ハリネズミはがっくりと肩を落とした。何もそこまでがっかりすることもないと思うんだけど。あんまり激しく落ち込むから、見ていて痛々しく思えてきた。

「ち、違うけど……………チエシヤ猫って人にはそう呼ばれたよ」

亜理紗がそう言うとハリネズミは、ガバッと起き上がった。

「じゃあアリスですね!？」

なんだ、この勢い？

「だ、だからあ、本当は違うんだけど……………」

「いいえ、猫がそう呼んだならアリスです!!」

ハリネズミはきっぱりと言いつつ切った。

「やっぱりなあ、そうだと思ってたんですよ!! だって匂い

」

「?」

「……………」

……………なんでそこで黙る？

「匂いが……………なんだって?」

たまらずに俺は聞いていた。

「え? いえ、別に」

……………ホントか?

「そんなことより、僕らのアリス!! おかえりなさい!!」

また亜理紗に詰め寄ろうとしたから胸のあたりを蹴り飛ばすと、小さく呻いて後退った。だが、そんなこともなかったかのようにすぐに復活した。

「僕は幸運です!! アリスに会えるなんて最高です!!」

実にでかい声だ。ちよつと五月蠅い。

「噂には聞いてたんですよう!! 僕は若いのでまだアリスに会ったことなくって、もう会えないんじゃないかなんて親方には言われませんでしたけど!! でも僕はずっと夢見てる、いつか絶対

「そこでハリネズミは再び黙り込んだ。

「クク」

「……………い、今笑った？」

「え？ いえ、別に」

「そう？」

「なんだか不穏当な笑い声が出た気がしたが、気のせいだったんだろうか。」

「ね、アリス、ぜひ当店へお越しください！！」

ハリネズミはピョンピョン飛び跳ねながら言った。

「当店って？」

「僕の親方がテーラーをやってるんですよ！！ ぜひ寄ってってください！！ 親方にも分けてあげたいですし！！ あ、そちらの方も一緒にどうぞ！！」

俺の方をみてそう言った。まあ、いつまでもこんな服じゃ心許ないし。

「で、分けるって一体何をだ？ 幸せか？」

「服だつてご入用でしょう！？ うちにはアリス専用の服がありますから！！」

「アリスの服？」

「さあさあ、ご案内しますね！！ すぐそこですから！！」

そう言つてハリネズミは軽快なステップで階段を降りていった。

俺らはそんなに早く降りられないから相当の時間を要したが。

三階と二階はまるでなにもないかのようになり、壁で封じられていた一階に何とかたどり着いてハリネズミの後を追うと、被服室の前で止まって扉を指差した。

「……………ここって被服室じゃない？」

「みただいな」

「いいええ、仕立て屋ですよ！！」

ほらつとハリネズミが指差したドアには、四階にあったのと同じ

ような小さなドアがくつついていた。その脇に、

『したてや・服お作りしマス』

という看板が立っている。

「さあ、どうぞどうぞ」

俺と亜理紗はハリネズミに促されて中に入った。

被服室の中には大小様々な洋服が、てんでバラバラに吊るされていた。人形サイズの服から天井に届きそうなほど長い丈の服まで（誰が着るんだ？）サイズは豊富だ。これなら、俺らが着られる服もありそうだ。作業机には床から梯子が掛けられていた。

「こつちですよ、アリス！」

ハリネズミは服の林を通り抜け、軽々と梯子を上っていく。俺たちはそれに続いた。

「遅いっ！！ 何油売ってやがる！！」

上りきった途端、威勢のいい声が飛んできて、俺は首をすくめた。

「お前がいないと針が足らねえだろっ！！」

机に広げられた生地には型紙がついている。その前で、男が仁王立ちになっていた。その手に何本も巨大な（普通の人の手としては普通サイズ）まち針を握っている。

顔は……………よく分らん。なぜなら、顔も体も大量の絆創膏に埋め尽くされているからだ。

……………絆創膏男？ 俺は額を手で押さえ、亜理紗は顔を手で覆っていた。

ああ……………また変人が……………。

「すみませーん親方あ！！」

ハリネズミは絆創膏親方に駆け寄ると、ぶるっと体を振るわせた。シャキンと体中の針が立つ。親方はそのちくちく立った針を幾本か引き抜いて、型紙を布に縫いとめていく。

……………  
まあ、俺らも縮んだりしてるし、すでに『普通』とは言えないけど。それなのに他人に普通を期待するのも変だよな。

自分で自分を宥めていると、ふと絆創膏親方と目が合った。

「ん？ 兄ちゃんと、その嬢ちゃん誰だ？」

「ああ、そうですね！！ そうなんですよう！！！」

ぴよんつとハリネズミが飛び跳ねたから、体の針が親方の手にぶつかりと刺さった。

「いつてエー！！」

「ああすみません、親方あ！！」

「おまえなア！！ いつもいつも！！！」

「ごめんなさい、ごめんなさい！！ でもでも、そんなことよりお客様なんですよう！！！」

憤懣やるかたないといったふうの親方だったが、俺らを見ると、大きく息を吸い込んで怒りを静めた。

「……………らっしやい！！ 何にいたしやしょ」

まるで寿司屋のようだ。回転寿司にしか行ったことないけど。

「あの、あたしたち、服を……………」

「服ね！！ オーダーメイドで最高の服をお作りしますぜ。どんなのがお好みで？」

「えーと……………」

亜理紗がなにか言おうとすると、すかさずハリネズミが割って入った。

「親方！！ 服ならあるんですよう！！！」

「ああ？ 何寝とぼけてんだ。この兄ちゃんと嬢ちゃんからは注文受けてねえだろ」

「違うんですよう。こちらのお兄さんはともかく、こっちはアリスなんですよう！！！」

「あつ……………アリスだとオ！？」

絆創膏に埋もれた親方の目がキラリと光った。俺は反射的に亜理紗を自分の後ろに回らせた。にしても、すごい絆創膏の数だ。一体何枚ぐらい貼ってあるんだろうか。風呂に入るときとかどうしてんだ？

「ア…………アリス……………」

親方が衝撃を受けたようによろめいた。

「え？ …………… あっ、いや、あたしは」

「お帰りっ、俺たちのアリス……！！！！」

感極まった親方は両手を広げ突進してきた。

「どらっ！！」

「ぐほあっ！！」

カウンターの要領で顎と頬と腹を打ち抜いてやった。よろめきながら、少しは落ち着いたようで、悪かったと謝ってきた。

「しかしアリスと会えるとはなア！！」

親方は感激の面持ちで亜理紗を見た。

「あ…………えっと……………」

これだけ歓迎されると訂正しにくいらしく、亜理紗は何か言いかけては押し黙るとかそんな感じだ。

「親方親方っ、アリスに服を出してあげてくださいよう」

弟子が親方をつつく。

「おおっ、そうだな！！ よし、倉庫から取ってくるからな。アリスはそこでちっと待っていてくれや。ああ、それと、その兄ちゃんはアリスと一緒にかい？」

「一緒にっ？」

「もとはもつとでかいかっていうことさ。どうなんだ？」

「ああ、そうだけど」

「じゃあ、年頃の男が気に入りそうなもん見繕ってくるからよ。ちよつと待っていてくれや。おいハリー！！ 手伝いな！！」

「はいっ！！」

親方はハリネズミのハリーを従えて机を降りると、ドア続きの隣部屋へと向かった。被服準備室が倉庫になっているらしい。

…………… なんだか、よく分からないけど服をもらえるらしい。よかった。一応服を作ったとはいえ、十月にこの軽装備は正直きつい。俺らは机の下に降りて二人を待つことにした。



なんでもいいけど、親方がハリーを従えた姿はさながら猛獣使いのようだった。

遅いなあ……………。何か困ったことでも起

こつたのか？ 手伝えることあるかな……………。

俺は暇を持って余したから、亜理紗を置いて倉庫に向かった。入り口まで来ると、中からかすかに師弟の話し声が聞こえてきた。

「……………ずいだろ……………」

「……………けど……………ンス……………」

「……………めだ……………女王に……………」

「……………噂どお……………なら……………」

入り口から中を覗くと、師弟が背中を丸め、頭をつき合わせていた。何かの相談をしているようだが、話の内容までは聞き取れない。

「すいませーん」

「うわあああああっ!?!」

声をかけると、叫び声と共に親方が飛び上がった。

「よ、よう兄ちゃん!?! ど、どうしたんだ!?!」

「……………そっちこそどうかしたのか?」

「べ、別に!?! どうもしてないぜ!?!」

その割には拳動が不振すぎる。

「と、とりあえず、すぐ持っていくから外で待っていてくれや!?!」

俺は肩を掴まれ、ぐいぐいと押し出された。

「親方あ、やつぱり一人じゃ持てませんよう。手伝ってくださいよう……………」

中からハリーの情けない声がする。

「お、おう!?!」

親方はぎくしゃくした動きで中に戻って行った。

……………なんなんだ、一体。

ややあって、二人は大きな白と黒の箱を運び出してきた。

「お待たせしましたあ」

「これ？ やたら大きくない？」

箱は敷布団を二枚並べたぐらいの大きさがあつた。ただし、今現在の俺から見たら、だ。

「いや、これがアリスの服だからな」

そう言つて親方はハリーに命じて蓋を開けさせた。中には赤い服が入っていた。深緋色というのか、シツクな赤だ。その脇には何か白い布と、黒い靴も入っていた。

「じゃあ、二人は向こうの小部屋で着替えてくれや」

そう言つて部屋の隅にあつた試着室を指差した。

「これが兄ちゃん服だからな」

今度は黒い箱の蓋を開けて言つた。中には白の箱と同じように赤い服が入っていて、その下にはジーンズのような黒っぽいズボンとスニーカーのような物が入っていた。

だが一つ、どう見ても大問題があつた。でかい。サイズ的には子供服ぐらいだが、それでも今の俺らからしたら超巨大なサイズだ。だが、そんな俺の抗議は見事に無視され、試着室に押し込まれた。

その間、亜理紗もぶつぶつと文句を言っていた。

絶対でかい。俺は箱の中の服を見下ろしてそう思つた。服を箱から引きずり出して再度そう思つた。三、四歳ぐらいの子供なら丁度いいかもしれない。箱の中には服の他に下着まで入っていた。だが、そこにはあえて触れない。慣れないふんどしでいい加減股が痛いし、中に入っていたのは赤いロングパーカーと黒のジーンズ、革のベルトにバツシュのようなスニーカー、それに虎と龍がプリントされたパンツとTシャツだった。

品揃えは最高だった。問題はこれがでかすぎるといふ点だが。仕方なく服に袖を通す。もちろん本気じゃない。袖だけで体がすっぽりはいりそうな大きさだ。だが、袖を通した途端、ぶかぶかだった袖がひゅつと縮まって吸い付くように俺の腕にフィットした。

全部着ると、最終的には俺の体形にぴったりになった。一度脱い

でもサイズは変わらず、着たままのサイズになっていた。同じように他のものも着ると、俺の体にぴったりとフィットした。

いつの間にか世の中は、俺の予想だにしないことになっていたようだ。全部を着終わると、箱の一番下に銀のチョーカーが入っていた。それもおなじように、俺の首のサイズに合わせて小さくなった。鏡の前に立って自分の姿を眺めていると、またひそひそ声が聞こえてきた。

「……………一本くらい……………」

「……………におい……………しよ……………」

「……………猫が……………」

「……………極上の……………あじ……………」

「……………じょうぶ……………」

さつきから何の話をしてんだ？ なんだか嫌な予感がしてきた。

俺は早々に試着室から出た。それと同じタイミングで亜理紗も試着室から出てきた。亜理紗の格好は

「ああ、お似合いです、お似合いですようー!!」

ハリーがそう言いながら飛んできて、亜理紗の格好をベタ褒めしていた。

亜理紗の格好は深紅のエプロンドレスで、とても可愛らしかった。その格好が恥ずかしいのか、顔を真っ赤にしていた。

「やっぱり、アリスはこうじゃないとな」

妙にうっとりした声で親方は頬をゆるませた。

「変じゃない？」

「変じゃないよ。すごく似合ってる」

俺に向かって言ったから率直な意見で返してやった。

「それであの……………お代とかは？」

さつきハリーは俺にお代はいらないと言ったが、そういうわけにはいかんだろう。

生地も仕立てもしっかりしているし、普通に買ったらかなりの値段になるだろう。

「あー……………それなんだがなあ」

「お代なんていいんですようー!!」

なぜか口ごもる親方を押しつけ、ハリーが前に出てきた。ちっちゃな手をすりあわせる。

「お代はいいんですけどオ……………その代わり一本もらえたらなっ  
て思っつて」

「一本つて……………何を？ あたし達、今何も持ってないんだけど  
……………」

「やだなあ、持ってるじゃないですかあー!!」

ハリーは、はしゃいだように手をバタつかせた。

「持ってるものならいいけど……………何を一本欲しいの？」  
「なんだか凄く嫌な予感がする。そういえば、さっき

……………一本くらい……………」

『……………極上の……………あじ……………』

あじ……………味？

「亜理紗ー!!」

「腕」

ハリーが言う直前に亜理紗を引っ張って後ろにまわらせた。

どつりでなんだか変だと思っつてたんだ。ずっと亜理紗のほつを見  
て鼻をヒクつかせてるし、内緒話で不穏当な単語が聞こえてくるし。

「な……………何……………?」

「腕、一本ください」

ハリーはとんでもない要求をにこやかに言っつてのけた。

「……………は？」

亜理紗は未だに状況を理解できていないらしい。俺はすぐに、身  
の回りに武器になる物がないかを探した。だが、使えそうなものは  
なかった。

「二本あるんだから一本くらいいいでしょう？」

「良いわけねえだろうが、このクソネズミー!!」

「ど……………どういうこと？ う、腕なんか何に使っつうの？」

亜理紗は突然の展開に頭がついていけてない。

「いつまでも現実から目えそらしてんな！！ こいつらはお前を捕つて食うつもりなんだよ！！」

「食べ……………！？ じよっ……………「冗談でしょ……………？」」

「冗談でこんなこと言うか！！ あいつらの言ってることよく聞いてみる！！」

前を向くと、親方がうつとりとした表情で、

「アリスの肉は甘くてとろける…………… この世にひとつの極上の肉……………」

なんてことを口走っていた。その口からは涎がたらたらと垂れていた。

「この人たち…………… 本気だ……………」

ようやく状況を理解したのか、はつきりと恐怖に満ちた声でそう言った。これで今日何回目だろ。

「い…………… 嫌っ！！」

亜理紗が拒絶を全面に押し出した。仮に戦うことになったら、亜理紗を守りながらだから実質二対一だ。しかも一体は動物。正直勝ち目は無い。

「な…………… なんであたしを食べようとするの？ あたしなんか食べても美味しくないよ……………」

「いやいや、アリスはおいしいですよ！！ すごくいい匂いがして……………」

ハリネズミは揚々としながら言っつて、不意にやめた。視線は俺らのさらに後ろに注がれている一体何なんだ？

振り返ると、そこにはついさっき別れたばかりのチェシャ猫が突っ立っていた。相変わらずのにんまり顔だ。

「チェシャ猫……………」

「何をしているんだい？」

言いながらチェシャ猫は親方の頭にまち針を一本刺した。さらにもう一本。

きゃつという短い悲鳴とともにカラフルな花が二本、親方の頭で花開いた。

「おお、おおっ……………猫じゃねエかつ……………」

親方はビクついたように笑った。頭に花を咲かせたまま。

「あんまりアリスを苛めると……………食うよ」

「ぎゃあっ！！」

今度は青いまち針の花が親方の頭に咲いた。

「お、おおっ、いや、分かってる、分かってるさ！！」

親方は慌てて弁明をした。……………いつからいたんだ？ こいつ。

「さあつ、仕事仕事！！ハリー、行くぞ！！」

そう言ってお花満開の親方は、ハリーの首根っこをつかんだ。ハリーは、アリスが食べたいですう、とごねるハリーを引きずって親方はすたこらと机を上がっていった。

俺たちは呆然とその姿を見送ってから、巨大なチエシヤ猫の顔を見上げた。相変わらずにやけた口元しか見えない。その巨大な口を見ていると、突然亜理紗が泣き出した。その様子からは、安堵というより恐怖が勝っているんだろう。

「あ、あたし、あたしは、おいしくないよ……………！！」

声が震えている。食われかける経験なんて普通は経験しないはずだ。その恐怖は計り知れないものだろう。

「アリスはおいしいよ」

だが、チエシヤ猫は安心させるようなことは言わなかった。

「おいしくないっ……………だから食べたりしないで……………！！」

「僕はアリスを食べないよ」

俺は巨大な笑い顔を見上げた。目が見えないから真偽を判断する材料に乏しい。正直信じられないが。

「おいしそうだけどね」

「！！……………」

油断ならないやつだ。やっぱり俺が守ってやらないと。

「服をもらったんだね」

そう言ってチエシヤ猫は俺と亜理紗の服をちょんちょんとつついた。

「さあアリス、シロウサギを追いかけてよう」

「やだ、追いかけない……………」

チエシヤ猫は優しく言ったが、亜理紗は徹底的に否定するらしい。

「皆、アリスが好きだからね、こんなところでうじうじしていると

」

チエシヤ猫ぐるぐると喉を鳴らした。

「食われるよ」

「!!!」

自分の置かれた状況をようやく理解したらしい。さっきからしきりにこつちを見て「どうする?」と視線が言っている。

「追いかけるしかないでしょ。このままここにいたら何が起きるか分からないし。それに、こんなのも一応盾代わりにはなるだろ?」

すると、亜理紗はようやく納得したような顔をした。

「分かった……………追いかければいいんでしょう?」

亜理紗がしぶしぶといった感じで呟くと、チエシヤ猫は顔をにんまりとさせて、

「いい子だね、アリス」

そう言って俺と亜理紗を手に乗せた。亜理紗は諦めと共にこつそりと、

「だからアリスじゃないんだけど……………」

と呟いた。

「ところで、シロウサギはどうやって探すんだ?　なんか手がかりでもあんのか?」

そう聞くと、チエシヤ猫はにんまり顔のまま首をかしげた。

「まさか分からないのに探そうとか言ってたの?」

「かけらが落ちている」

「かけら?」

「シロウサギの記憶のかけら」

「ごめん、言ってる意味が分かんない。なんなの？ それ」

「つまりさ、さっき四階で見たシロウサギがそのかけらってやつだろ？ だったら、このあたりにあるウサギがいたっていう痕跡を探せばいいってことだ」

「？」

亜理紗はさらにわけが分からないという風な顔をしている。

「要するに、宝探しみたいなもんだよ。記憶のかけらはシロウサギを探すのに必要なヒントみたいな物。かけらの一つ一つが破れた地図みたいなものだと思えばいい」

「なんだか面倒くさそうだね。餌とかでおびき出せないかな？ にんじんとか」

「それは無理だろ。まあ、餌になりそうなものはあるけど」

「ウサギだったらにんじんでしょ？ 他に何かあるっていうの？」

「それは……………」

餌になりそうな物、あるっちゃあるんだけど……………。言っていないのかな？

「それは？」

「なんだか誤魔化せそうにないな。腹をくくるか。」

「お前」

「……………は？」

「この世界のやつらはアリスが好きなんだろ？ だったら、お前を餌にしたほうが効率がいいと思うんだよ」

「まだ俺は亜理紗がアリスだっていう点は納得してないけど。でもいい加減現実を受け止めないと、後々困るだろうし。」

「あ、あたしが囹になるの！？ 嫌だよ！！ 絶対、断固反対！！」

「じゃあ地道に行くしかないな。じゃあ、とりあえず……………」

「周りを見回すが、特に手がかりは見当たらない。ここにいないことは既に分かっているから、俺たちは隣の教室に行くことにした。」

被服室の隣には、なぜか三階にあるはずの視聴覚室があった。不



思議ではあるが、今までの一連の出来事からするとそれほど不思議でもない。改めて人間の適応力に驚いた。中に入ると、カーテンは閉め切られていて薄暗かった。分厚い遮光カーテンの隙間から、夕暮れの赤い光が漏れている。天井から白いロールスクリーンが下りていて、黒板を覆い隠していた。席の後ろに作られた専用台のうえにプロジェクターがどん、と乗っかっている。

「誰かが出しつばなしのまま帰っちゃったのかな……………」

チエシヤ猫が何気なく俺らを台の上に降ろした。チエシヤ猫は何も言わなかったが、俺にはスイッチを入れてみると言っている様に感じられた。

スイッチを押すと、プロジェクターが動き出して、スクリーンに映像が映し出された。

街中の映像のようだ。行き交う人の波が画面を埋め尽くし、賑やかな印象を受けた。だが、どこかで見たような気がするのは何故だろう？

「これ……………」

亜理紗も見たことがあるらしい。デジャヴってやつかな？ しかし、ここはどこだ？

俺は食い入るように画面を凝視した。白い洒落たビル。正面のガラスの自動ドアが開閉し、人が行ったり来たりしている。その足元に赤いマットが敷いてあった。そこには金色の文字で、『ホテル・ブランリエーヴル』と書いてある。

「あ、これ駅前のホテルだ。前に見たことある」

亜理紗がそう呟いた。

「あー！！ あれー！！」

そう言っただスクリーンの右端を指差した。一体何が

「あ、あれは…………… さっきのウサギじゃねえか」

そこには、立ち止まってホテルを見上げているウサギが映っていた。さつきみたウサギと同じ姿をしている。恐らく同一のものだろう。先程と同じく少し透けている。ウサギはふらっと揺らぐと、そ

のままホテルの中へと入っていった。

「今の見た!？」

「見たけど………なんだったんだ? 一体」

あんなの無しだろ。大体、あそこまでどう行けば

「チエシヤ猫、あそこまで連れていってくれない?」

亜理紗がそう言うと、チエシヤ猫は

「僕らのアリス、きみが望むのならば」

と言った。

「じゃあさっさと行こうぜ。いつまでもここにいても仕方ないし」

すると、チエシヤ猫は俺と亜理紗をつまみ上げ、自分の手の上に

乗せた。そして、俺らはチエシヤ猫に連れられ、校舎を脱出した。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7565t/>

---

歪みの国のアリス

2011年6月2日10時10分発行